

パレスチナ・ガザ地区 アトファルナろう学校 ～ ろう児・ろう者の育ち生きる場所 ～

土井幸美

横浜市立市ヶ尾小学校 きこえとことばの教室 勤務
NPOパレスチナ子どものキャンペーン ボランティア



〔はじめに〕

2008年が始まって間もない1月27日(日)、NPOパレスチナ子どものキャンペーンの招聘で、パレスチナ・ガザ地区からアトファルナろう学校の校長が来日しました。日本ではあまり報道されていませんが、ガザ地区はイスラエルによる隔離と封鎖政策により人々には移動の自由もありません。「屋根のない強制収容所」と化していると校長のジェリー・シャワさんは、来日会見で訴えていました(毎日新聞1月26日)。彼女はアメリカからガザにお嫁に来た方なので、USAのパスポートもお持ちで、特別にガザ地区からの出入国許可をもらうことができたのです。(アメリカ人であり、テロとは全く関係のない「ろう学校の校長」という彼女でもなかなかイスラエルの許可は出ないのが現状です。これまでも招聘する予定をキャンセルせざるを得なかったことが何度かありました。)この講演会の折、しばらくぶりに私は矢沢先生にお会いし、今回の原稿を依頼されました。日頃より、日本のろうの方々、難聴の方々、聴覚障がい教育に関わる方々にアトファルナろう学校を紹介したいなあ、と思っておりましたので大変ありがたい機会をいただき感謝しています。

〔私とアトファルナの関わりについて〕

私は、1998年からアトファルナろう学校の子どもたちや先生、スタッフとの交流を続けてきました。(上の写真は、2005年にガザを訪れた時の写真です。左端が私で、右端が日本でASLを教えていらしたDeafの先生です。彼女と一緒に、アトファルナろう学校の英語学習に役立つDVD作りをしてきました。アトファルナの幼稚部の先生(ろう者)をキャストに、習いたてのASLで入門会話を演じてもらっているDVDです。制作過程での先生たちは積極的でとても楽しそうにお芝居をされていました。この盛り上がりと一体感は、できあがったDVDの価値と同じくらい「貴重な経験」になったと感じました。先生たちの笑顔やおしゃべりから、イスラエルによる封鎖によって何もかもが自由にならない日常から解放された喜びを感じられました。

既にこの頃、パレスチナ人に対してのガザ地区からの出入りは厳しく制限されていましたし、それどころか外国人もほとんど出入りができなくなっていました。国連職員やプレスカードを持つジャーナリスト、イスラエル政府から認められた国際NGOなどのスタッフのみが、特例としてガザ地区に出入りできるだけの状態です。世界から切り離され、物心両面で窒息状態にあるガザ地区に「外の風(雰囲気)」を運び込み、「外の世界の人びと」がガザ地区にいる人び

とのことを忘れ去っていないことを伝え実感してもらうことが、いかに孤立を味わっているガザの人びとにとって重要なことかを思い知らされたのでした。

1998年当時は日本のろう学校に勤めていましたので、自分の学校とアトファルナの子もたちの交流を企画し、担任している子どもたちの絵などを持って現地を訪問したのがきっかけでした。具体的な内容は、以下の通りです。

1998年 夏 初めての訪問（見学・交流）

1999年 夏 教員のためのレクチャー（横浜のろう教育・実践の紹介など）

2000年 春 体育を担当・子どもたちとの交流

2001年 4月～7月 派遣ボランティア（図工を担当）

2002年11月～2002年2月 派遣ボランティア

（図工を担当・教材調達・緊急支援物資の配給）

2002年 夏 教員のためのワークショップ

2003年 夏 教員のためのワークショップ

2004年 夏 家庭訪問・アウトリーチ調査

2005年 夏 療育・啓発ビデオ作りに参加

10年前からずっと（今でもそのままの雰囲気なのですが）、アトファルナろう学校の先生たちは向上心が旺盛で、教育活動について具体的にできる限り多くを吸収したいという姿勢がひしひしと伝わってくるのです。そういう先生たちと学びあうことで、私自身も教えることへの情熱やエネルギーをもらってきたように思います。

[アトファルナろう学校ができる前]



左上の写真は、20年ほど前のヨルダンの寄宿ろう学校の写真です。右上の写真は、2005年のガザのろう者コミュニティの若者たちの写真です。左の写真の中の子どもの何人かが、右の写真の中にも写っています。どの方がどの方に成長されたか、わかりますか？

現在、この写真に写っていらっしやるろう者は、アトファルナろう学校の幼稚部の先生とし

て働いていらっしゃる方、地域のリハビリテーションセンターで技術者や指導員として働いていらっしゃる方、パレスチナ手話の辞書の編纂に関わっていらっしゃる方、家業の養鶏業を継いでおられる方などなど、歩んでいる道はさまざまですが、自立した生活を送っておられます。彼らと話していると「教育を適切に受けられること」の重要性を切実に感じます。

20年前、国連支援によるプロジェクトでヨルダンのろう学校で学ぶことのできた子ども達は、ガザの中でもほんの一握りのろう児だけでした。それに該当しなかった多くのろう児・聴覚障がい児は、適切な教育の機会を与えられないまま、大人にならざるを得ませんでした。

1992年、「NPO・パレスチナ子どものキャンペーン」の支援を受けて、ガザ地区で最初のろう学校が開校するまで、ガザ地区には聴覚障がい児を専門に教育する施設はありませんでした。ろうの子ども達の養育・教育は家庭に任されていました。私費や国連支援で外国のろう学校に行かせる家庭もあれば、ガザの一般学校に行かせている家庭もありました。一般学校に合わなかった子どもは、家で手伝いをさせたり、「聴覚障がい」という特性はあまり気に留めず、言葉の遅れを主訴とし、知的障害の子ども施設の通わせる家庭などさまざまでした。

そういう状況を憂い、「聴覚障がい児に適切な教育の場を保障したい」とガザ地区でのろう学校設立の必要性を必至に海外の支援者たちに訴えていたのが、現在の校長・ジェリー・シャワさんです。彼女の熱意を受けて、「パレスチナ子どものキャンペーン」がジェリーさんと二人三脚を始めたのが、アトファルナろう学校です。開校当初の生徒数は27名でした。

(右上は、アトファルナの職業訓練センターで製作された刺しゅう製品を持っているジェリー・シャワ校長先生です。)

[耳のこと、きこえのことが心配?・・・だったら、アトファルナに行け!!]

現在のアトファルナろう学校は、幼児・児童・生徒数300人に近くなっています。(それから職業訓練生が70人ほどいます。)ただ、これでもガザの聴覚障がい子どもがすべてアトファルナに来ているわけではありません。地域のリハビリテーションセンターでケアを受けている子どももいます。しかし、多くのご家庭がアトファルナで教育を受けさせたいと考え、近所でなくてもわざわざ通わせています。先生たちやソーシャルワーカー



の熱心な指導姿勢



に対しての評価もありますが、ガザ地区封鎖の影響でお父さんの失業状態が長く続き、家では紅茶とパンくらいしか食べさせてあげられない家庭にとって、アトファルナで提供される給食や遊具は大変魅力的です。アトファルナは、聴覚障がいについての支援だけでなく、イスラエルの「占領下」の人々の暮らしも支えている側面があるのです。

1998年ごろからは「ろう学校」「職業訓練センター」という教育機関の役割だけでなく、オーディオロジー部門、言語療法部門、養育相談部門まで備える「きこえやことばに関する総合センター」となっています。左の写真は、言語療法士が言語発達遅滞の子どもに言語指導をしているようです。私が2001年にアトファルナにいた頃、パレスチナの歴史や政治では知る人ぞ知る、アフマド・ヤシーン氏もアトファルナに聴力検査に来ていたのでびっくりしました。それくらい、「きこえ」や「ことば」に心配がある人はみな、アトファルナに相談に来ているということです。オーディオロジー部門のスタッフは、アトファルナを訪れた人びとのためだけでなく、一般の小学校での聴力検査や耳に関する出張相談も地域で行うことがあります。

【アトファルナの教育と周辺への影響力】



アトファルナろう学校では、「ろう者の第一言語は手話」という基本方針で教育活動がなされています。先生たちには異動もなく、15年間ずっとアトファルナで聴覚障がい児教育に携わっておられる方も多いため、聴者の先生の手話能力も大変高いです。職員は事務員であっても手話を学ぶことが奨励され、聴覚障がい理解の研修を受けることが義務とされていました。「今日は、オーディオグラムの見方を学んだのよ。」とジェリー校長の秘書が私に楽しそうに話してくれたこともあります。米国のギャロデッド大学が「デフ・パラダイス」と言われるように、アトファルナも「デフ・パラダイス」だなあと感じる事がよくありました。主役は、いつも、ろうの人々なのです。ジェリー先生は、教員の半分をろう者にすることが目標だと話しておられました。今は、三分の一くらいだということです。（幼稚部のろうの先生の割合はかなりジェリーさんの理想に近い状態になっています。）

ただ、アトファルナのすばらしいところは、[～でなければならぬ]といった雰囲気がないところです。聴覚活用のできる子どもは、口話でもコミュニケーションをしています。言語療法士による取り出し授業で、発音指導も受けています。授業は手話を用いて進められますが、聴者の先生たちは、子どもに合わせて声も出しています。ろうの先生も、手話のできない人には、声を出して話そうとしてくれます。言語獲得の面から厳密に考えていくとアトファルナの教育実践には、多くの突っ込みどころがあるのかもしれませんが、しかし、私は「こういうのもありだな」と思うようになりました。アトファルナでボランティアを始めた頃は、「これで本当に、十分な言語獲得ができるのだろうか」と疑問に思うこともあったのですが、その社会で自立して生きていくための言語力や社会性は、そこ・ここの違いがあってもいいわけで、

ただ、アトファルナのすばらしいところは、[～でなければならぬ]といった雰囲気がないところです。聴覚活用のできる子どもは、口話でもコミュニケーションをしています。言語療法士による取り出し授業で、発音指導も受けています。授業は手話を用いて進められますが、聴者の先生たちは、子どもに合わせて声も出しています。ろうの先生も、手話のできない人には、声を出して話そうとしてくれます。言語獲得の面から厳密に考えていくとアトファルナの教育実践には、多くの突っ込みどころがあるのかもしれませんが、しかし、私は「こういうのもありだな」と思うようになりました。アトファルナでボランティアを始めた頃は、「これで本当に、十分な言語獲得ができるのだろうか」と疑問に思うこともあったのですが、その社会で自立して生きていくための言語力や社会性は、そこ・ここの違いがあってもいいわけで、



私の見方だけが正しいなどと考えるのは傲慢なことなのだと思うようになりました。

「いつも、ろう者が主役」といったコンセンサスが学校・組織の中で根付いているということが、子ども達の自尊感情をしっかりと育て、自由な雰囲気を作り出しているのだとも思います。翻って、日本のろう学校は、本当に「ろう者や聴覚障がい子どもたちが主役」となり得ているのだろうか・・・と考えさせられるようになりました。

前ページの下の写真は、アトファルナの子どもたちが、聴者の子ども達のサマー・キャンプ（夏休みの学童保育のようなもの）に出向いて、「きこえない人たちのコミュニケーション」について伝える交流活動をしているところです。ジェスチャークイズを導入にして、手話について地域の子どもたちに啓発を促すプログラムです。ろうの先生達も視覚によるコミュニケーションを楽しく紹介され、子ども達が互いの違いに頓着せずコミュニケーションを取ろうとしていくようすが心地良かったです。



アトファルナでは、こういった地域への啓発活動も、近年盛んになってきています。ろう児をもつ親や家族のためだけでなく、地域の人びとにも手話講座を開いています（右の写真）。地域のリハビリテーションセンターの職員や町内会の役員さんなど、身近にいるろう者のために手話を習ってみようとする人が案外多くいるのに驚きました。手話講座のためのテキスト 1~4 巻を先生方で編集出版されています。



左の写真は、アトファルナろう学校の先生たちがろう成人に対して行っている「識字教室」です。1992年までガザ地区にろう学校は無かったので、多くのろう成人は読み書きができず、かんたんな四則計算もやり方を知りません。その人たちのために、先生たちがボランティアで識字教室を開いています。幼稚部で教えているろうの先生

も参加しています。彼らの、真剣な表情で授業を受ける姿を見た時、まるで過去の時間を取り戻そうとしているかのような意気込みを感じます。「学ぶ」機会を与えられなかったために、自分の名前も書けない子どもだった人々が、いかに大変な苦勞や悔しい思いをしながら生活してきたのか、伝わってくるようでした。

右の写真は、療育相談部門のソーシャルワーカーが、お母さんと幼児と一緒に、コミュニケーションのとり方の指導をしているところです。アトファルナのスタッフ達も、幼稚部以前の聴覚障がい児教育の重要性を感じていたのですが、予算の関係で手を出せずにいました。しかし、2003年には二つの部屋が確保され、親子のために提供される場所とスタッフが実現しました。実際に、子どもとの活動を通して、お母さんたちが学びます。一番左にいるのがソーシャルワーカーのララさんですが、とても上手にお母さんを指導していました。セッションが終わると、このお母さんは「ここのお陰で、家に帰ってからの子どもたちとのやり取りがだんだんと楽しくなってきたの」と、微笑みながら帰っていかれました。



アトファルナのソーシャルワーカー達は、アトファルナの中だけでなく、アトファルナに通えない子どもがいる家庭を訪問して、親や家族に聴覚障害の子どもの理解をしてもらうようにもしています。いくつかの家庭訪問に同行させてもらったことがあります。ソーシャルワーカー達は、とてもよく親達の話の聴いていました。心配、不安、苦悩、愚痴、・・・いろいろなレベルの話に親身に耳を傾けているので、それぞれのご家庭は、アトファルナに対して本当に信頼を寄せ、頼りにしているのです。

右の写真は、地域の女性センターで「聴覚に障害のある子が生まれたら」という講演を行い、安心して母親が子育てをできるように啓発活動を行っているようです。これから母親になろうという若い女性達が、ソーシャルワーカーに積極的に質問する姿が印象的でした。



こうしてみると、子どもたちが生まれる前からアトファルナの「子ども達への支え」が始まっていることがわかります。

[アトファルナの窮地]

ガザ地区の聴覚障がい・ろうのこどもへの支援の中心的存在であるアトファルナですが、政治的・社会的な不安定状況により窮地に追いやられています。例えば、イスラエルによる経済封鎖により、補聴器の電池も、海外からの支援者による中古補聴器も届かなくなっています。海外からの学校の運営資金も激減しているといわれています。追い討ちをかけるように、ガザにはこの2月の終わりから3月はじめ、イスラエル軍の大規模な空爆や攻撃があり、14歳のビラル君が犠牲になりました。2001年からアトファルナに通っていた少年です。ガザの混乱した状況の中で、衝突に巻き込まれて亡くなったそうです。職業訓練センターの生徒の中にも

爆撃によって被害を受けた方がいらっしゃるそうです。今回のイスラエルの大規模な攻撃では、少なくとも130人が死亡していて、その4分の一が子ども達です。イスラエル軍にどんな脅威も与えない子ども達が過剰な軍事行動によって命を奪われている現状について、日本のみなさまにも関心を寄せていただきたいと思います。

15年をかけ、コツコツと築いてきたガザ地区のろう者コミュニティと聴者とのつながり。ガザの全体状況が悪化すれば、必然的にアトファルナの状況も悪影響を受けます。そんな劣悪な日常の中で「Anyway,..... my life is going.」（それでも、私達の日々は続く）とアトファルナの人びともがんばって生きています。私は彼らをととも尊敬しています。そんな彼らと今後も繋がっていきたいと思っています。みなさんもアトファルナサポーターになりませんか？